

令和6年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【与野南中学校】

⑥	次年度への課題と授業改善策
知識・技能	全国学力・学習状況調査とさいたま市学習状況調査の結果から、全体として基礎的・基本的な「知識・技能」の定着が図れた。一方、根拠を基に説明をする問いや漢字、単語などの理解面で課題がある生徒も散見された。全体的に平均点が高い傾向がある中で、基礎的な内容を理解することに困難を抱えている生徒がいることを踏まえた授業改善が必要であり、内在する生徒間の個人差に応じた「個別最適な学び」を充実させていく必要がある。生徒が何につまづき、何を得意にしているのかを各教科の特性に応じながら把握し、学びの手立てを講じる必要がある。TDL(Time to deepen your learning: 学びを深める時間)型授業において、学びの過程や理解したことを把握し振り返る機会を設け、自己評価を積み重ねながらステップアップを実感できるような授業改善を進めていく。
思考・判断・表現	全国学力・学習状況調査とさいたま市学習状況調査の結果から、全体として基礎的・基本的な「思考・判断・表現力」の定着が図れた。一方、国語では「書くこと」、数学では「記述」の問題に対して課題が見られた。また、無回答率が高い問題も複数存在したことから、難解な問題や資料から多角的に思考し、選択・判断する力が問われる問題に積極的に向き合うを育む必要がある。知識・理解が思考の根幹にあることを踏まえつつ、①生徒が多様な思考(考え方、問題への向き合い方、捉え方など)へと導けるような教師の働きかけ、②多様な思考に触れるためのTDL(Time to deepen your learning: 学びを深める時間)型授業における生徒同士の協働的な学びの機会の設定積極的に進めていく。単元全体を見通した上で、つまづきやすい分野(問題)について、生徒の理解や実態に合わせて柔軟に指導・サポートできる工夫を講じていく。

①	今年度の課題と授業改善策		
	学習上・指導上の課題		授業改善策【評価方法】
知識・技能	<学習上の課題> 各教科で定着率の低い分野・単元が散見され、知識として十分に定着していない。 <指導上の課題> 生徒が自らの課題に向き合い、苦手分野を把握させるための指導が行き届いていない。	⇒	①教科と単元の特性に応じて「単元内自由進度学習」を取り入れ、スタディサプリやドリルパークを活用して生徒の学習段階に応じた課題を選択させ、生徒の理解度に応じた個別の指導を行う。 【①教科や単元の特性に応じて年間を通して実施】 ②話し合い活動やタブレット端末上での意見共有ツールを活用した協働的な学びの機会を設定し、「学び方を学ぶ」指導を継続的に行うことで、生徒の学びの自走を図る。【②各単元で1回以上実施】
思考・判断・表現	<学習上の課題> 読み取った情報を目的に応じ取捨選択したり、適切に要約したりする力が不足している。 <指導上の課題> 学んだことを要約をしたり、互いの考えを伝え合ったりする活動を行わせること、十分な趣意説明を行い生徒に目的を持って学習活動を行わせることが不十分である。	⇒	①単元導入時や授業開始時にミニガイダンス(学習課題の確認)を設定し、生徒が学習の見通しを立て、目標を生徒がもてるようにする。 ②教科や単元の特性に応じて、学習課題や作品づくりに取り組む際にICT機器を効果的に活用し、友だちの考えを知ることによって自己評価につなげる指導を行う。【①・②年間を通して実施】 ③各教科の授業で、調べた内容やデータから自分の考えをまとめ、根拠をもって説明する場面を設定する。【③年間を通して実施】

⑤	評価(※)	調査結果 授業改善策の達成状況
知識・技能	A	令和6年度さいたま市学習状況調査の「知識・技能」において、市の平均正答率と自校の平均正答率結果とを比較し、全学年・全教科において市平均を上回った。教科・領域の特性に応じて「単元内自由進度学習」の考え方を取り入れた授業を展開した。またスタディサプリやドリルパークを活用し、生徒の学習段階に応じた課題を選択させた。そして生徒の理解度に応じて個別の指導を行った。また、話し合い活動やタブレット端末上での意見共有ツールを活用した協働的な学びの機会を設けることで、生徒自らが気づき、発見する場面を作った。このような「学び方を学ぶ」指導を継続的に行うことにより、生徒の学びの自走を図ることができた。
思考・判断・表現	A	令和6年度さいたま市学習状況調査の「思考・判断・表現」において、市の平均正答率と自校の平均正答率結果とを比較し、全学年・全教科において市平均を上回った。各教科の授業で、teamsやムーブノートなどの課題機能、心ざしけん等の意見共有機能を適宜活用し、ある課題に対して根拠をもって説明したり、他者の考えに触れながら自らの考えを相対化して再思考できる場面を設定した。また、単元内自由進度学習の手法を生かしたTDL(Time to deepen your learning: 学びを深める時間)型授業の導入により、生徒自身の理解度や興味関心に応じた多様な学びの展開が見られ、生徒の学びの自走を図る一助になることができた。

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(概ね達成) C 6割未満(あと一歩)

②	全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	令和6年度全国学力・学習状況調査の「知識・理解」において、全国(公立)の平均正答率と自校の平均正答率を比較し、ほとんどの問題で全国・埼玉県平均を上回った。一方、国語の「文脈に即して正しく漢字を書くこと」を測る設問において、全国・埼玉県平均を若干下回った。一文の中に登場する複数の漢字に対して、文脈に応じて適切な漢字を選択することが苦手な傾向がある。また、令和6年度全国学力・学習状況調査「ICT機器を活用して」自分のペースで理解しながら学習を進めることができる」における肯定的回答は、全国(公立)と比較して、約2%低く、「そう思わない」の回答は約4%高い結果となっている。生徒の学習段階に応じた課題選択と理解度に応じた個別の指導を徹底していきたい。
思考・判断・表現	国語の「意見と根拠など情報と情報との関係について理解しているかどうかを問う設問において、課題がみられた。解答類型を見てみると、根拠となる部分を筆者の主張したい内容(意見)と誤読しているものが多く、意見と根拠のつながりを意識して文章を捉える力が不十分であると考えられる。ただし、令和6年度全国学力・学習状況調査「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」における肯定的な回答の割合は約81.7%であった。子ども主体の学びとなるような授業を今後も継続していく。

①結果分析(管理職・学年主任等)

②詳細分析(学年・教科担当)

④	さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	全体的に高い正答率であり、日ごろの学習や学びに向かう姿勢が結果に表れている。他方、社会科の「世界の様々な地域」では、正距方位図法と主題図からの読み取りで正答率が低く、地図資料を読み取るために必要な技能(陸地と海洋の空間把握、緯線経線の位置関係等)の定着が課題があることが示された。地図資料に触れる機会を多く設定し、自然条件や人々の暮らしとリンクして考えることで、技能を習得しながら世界地理に親しみを感じさせる工夫を講じていく必要がある。理科では、化学分野の化学式、化学反応式や気体の分野で課題が見られた。また、地学分野の地層や化石、前線についての理解について課題が見られた。いずれも中学生が苦手な単元である。課題はあるが、基本的な知識や思考力は身についていると考えられる。
思考・判断・表現	全体的に高い正答率であり、日ごろの学習や学びに向かう姿勢が結果に表れている。他方、各教科で無回答率が高い問題が複数あり、回答するために必要な基礎的・基本的な知識の定着の弱さと、深い思考力が試される問題と向き合ったときに湧き出る思考の意欲が少ない可能性が考えられる。この場合、多様な見方・考え方をもちつて問いに向き合う姿勢を育むことが改善に繋がる。日々の授業や家庭学習の中で、理解を向上を図る演習時間の確保、与えられた資料や課題に対して協働的に取り組みながら多様な考えに触れる機会を増やすなどの工夫を講じていく必要がある。また、理解を深める方策としての要約活動やペアワークが有効であり、このような活動を継続し、授業改善に努めていく。

③	中間期報告		中間期見直し
	評価(※)	授業改善策の達成状況	授業改善策【評価方法】
知識・技能	B	単元内自由進度学習の手法を取り入れた授業展開を進め、生徒が学びの見通しを立てて、様々な学習ツールから学ぶ環境を整備している。「学び方を学ぶ」ための話し合いや教え合いの時間を確保し、その中で「協働的な学び」の機会を増やしながら、孤学に陥らない指導を心かけている。	変更なし
思考・判断・表現	B	単元の目標を早期に示し、見通しをもって学習に取り組めるよう授業を展開した。また、ICT機器を活用し、生徒同士が互いの思考とその過程を確認しながら学習を深められるように配慮した。	変更なし

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(概ね達成) C 6割未満(あと一歩)